

宙の彼方に浮かぶ鎮石みたいに、
心のど真ん中に構えて、

全ての音が静かに収まっていく

そんな安らぎもつかの間

気づいたらわたし、暗闇に向かってまた降りていくんだ

その途中でさ、何か触れるんだよ

まるで宙の温もりが手のひらに伝わってくるみたいに

遙か先の、見えない極みに向かって

そして路傍の石がいつもの景色を蹴り上げて、

不意に耳に届く声がある

命じる夢の外へ体を向けたわたしは

少しだけ微笑んでいたみたい

そのとき、何か言っただっけ？

言葉はどこから現れて、

私の奥の、誰もいない静かな場所を

そっと通り過ぎていったのかもしれない